

世界文学試論

宮下 華

二〇一八年七月、第八回 IWL (Institute for World Literature) セッションが、東京大学本郷キャンパスで開かれた。三十六か国、五十三の機関から、実に百三十名の文学研究者が集まり、約一か月の間、セミナーやコロキアム、講演やパネル・ディスカッションなどを通して、「世界文学」の過去・現在・未来について熱い議論を交わした。

IWLを創設した米ハーバード大学教授デイヴィッド・ダムロッシュは、フランコ・モレットティ、パスカル・カサノヴァらとともに、今世紀初めに「世界文学」の方法論的基礎付けに取り組んだ人物である。彼の二〇〇三年の著作、『世界文学とは何か？』はいまやこの分野における基本書となっており、そのなかで彼が提示した世界文学についての複数の定義は、今日の世界文学にまつわる議論の中心をなしている。ある文学作品がその生まれ出した文化圏を越えて流通したときに何が起こるかというグローバルなパースペクティヴと、迎え入れられた先々で人々に実際にどのように読まれるかとい

うローカルなパースペクティヴとを融合させた点や、旅をすることで文学作品に新たな生命が宿り、その真正さや本質が損なわれるどころか、むしろ作品の価値が増すのだと主張した点が、ダムロッシュの世界文学構想の根幹にあるといえよう。

二〇一二年四月、バンクーバーで開かれたACLA (American Comparative Literature Association) 総会で、彼はガヤトリ・チャクラヴァオルティ・スピヴァクと、今日の比較文学の置かれている状況、世界文学の直面する課題やそれが内包する可能性などについて討論している¹⁾。以下では、そのときの議論の一端を取り上げることで、世界文学について考えるためのひとつの糸口を呈示したい。

実際の教育現場における世界文学との向き合い方を重視するダムロッシュは、研究者間の協同、さらには教師と生徒の間の協同が不可欠だと主張し、彼自身が学部生向けの世界文学の授業において実践しているある取り組みを紹介する。生

徒たちを少数数のグループに分けて発表を担当させる際、各グループに、対象テキストに関する語学的・文化的知識を持ち合わせている学生を割り当てるよう工夫する。あるグループでは、ペルシア語を学習中のドミニカ人学生が、一四世紀ペルシアの詩を見事に暗唱し、クラス全員の拍手喝采を受けたという。多様な文化的バックグラウンドをもつ学生が集まるアメリカの教室では、教師と生徒が垣根を越えて協力しあうことで、個々人の能力的限界を超えて世界の文学と接することが可能となり、教室の中にながらも全く異なる世界に触れることができるのだと言う。世界文学など不可能だと言う嘲笑への、ダムロツシユらしい実際的な応答だといえよう。

これに対するスピヴァクの反応は厳しい。彼女はまず、報告者である生徒（ここではドミニカ出身の彼）の言語能力と文化的知識が、彼の出身国での高等教育の基準をも満たすレベルにあるかを問い、そうでなければ、彼は報告者としてふさわしくないと断言する。二人のやり取りを最後まで読めば、両者の立場が対立しているのではないことは明らかだが、少なくともこの部分には、文学作品やその文化的背景と「距離をとる」というスタンスに対するスピヴァクの危惧が滲み出ている。そしてこのディタッチメントこそ、今日世界文学に対して多方面から注がれる懐疑的眼差しの根底にあるように思う。

スピヴァクのこの態度は、翻訳に対する彼女の態度と並べて考えてみることができる。「翻訳のポリティックス」と題するエッセイのなかで、スピヴァクは、翻訳とは最も親密な読みの行為であり、翻訳者は親密な読者となる権利をみずから獲得しなければならない、と述べる。ここでスピヴァクの念頭にあるのは、ヨーロッパ白人女性による、第三世界の女性の書き物の翻訳である。言語は、言葉と言葉とを体系的に結びつけるロジックと、言葉の周囲に漂う沈黙のなかで作用して論理性を破壊する可能性を孕むレトリックとの複雑な関係から成り立っているとしたうえで、西洋のフェミニストらは往々にして、原文テキストの書かれた言語におけるこのレトリカルな側面を理解せずに翻訳を行うのだと言う。そこからスピヴァクは、原文の言語におけるロジックとレトリックの関係性を十分理解すること、つまりその言語を親密に知ることの重要性を主張するに至るのだが、彼女の言うインテイマシーとは「時折、親密な事柄について話すのに、（自分の第一言語よりも）その言語を使うのを好む」境地のことである。スピヴァクは、彼女に特有の容赦のない論調で、「第三世界の女性の書き物は例外なく素晴らしいという差別的な前提」に立ち「女性の団結を声高に叫ぶことでみんなの人生を不愉快にする、覇権文化・一言語社会出身の女性」らを告発しているのだ。

もちろん、ここでスピヴァクが舌鋒鋭く糾弾するのはプロの翻訳家であり、ダムロツシユの授業で発表を行ったドミニカ人の学部生に同程度の親密な知識を求めているのではない。しかし、ダムロツシユが世界文学の定義の三つ目として「自分にとつての今・この彼方にある世界と、距離を保ちながら関わる方法」と述べていることから、彼とスピヴァクの間には、「親密さ」と「距離」をめぐる基本的態度のちがいを見て取ることが出来る。マイナー言語に関する知識は初歩的なものでよく、あとは翻訳に頼ればよいということでは、英語やその他の主要言語の覇権を増々強固なものにするだけだろう。かといって、原文精読以外は認めず、言語の切れ目が研究の切れ目となってしまうえば、文学研究はあまりに狭く貧しいものとなるだろう。「親密さ」と「距離」の問題にはそう簡単に決着がつきそうもない。思うに、大事なものは近いか遠いかという点ではなく、その距離を正確に測る、ことなのではないか。まずは自己の立脚点をしっかりと固め、そのうえで、対象テキストと自己との距離を、厳しい目で正確に測る。自分が自分の裁定者となり、スピヴァクの言う「親密な読者」となり得ているかどうか、判断を下す。そうした弁えのうえで、あえて距離を保ったままテキストと向き合うという立場であれば、あつてよいのではないだろうか。それは、自分の研究に広さを与えるだけでなく、それがさら

にあらゆる方向へと広がっていく可能性を示唆し、今後の研究の発展に寄与することにもなるであろう。

世界文学が再び注目を浴びはじめた今世紀初め、「なぜいま世界文学なのか」という内省的な問いへの回答も試みられた。トムセンは、カルチュラル・グローバリゼーションの進展によつて歴史・言語・文学の三位一体が以前のような堅固さを持たなくなつたことや、国家の枠組みのなかでは捉えきれない作家や作品群（ホロコースト文学、移民文学等）が登場してきたことなどを挙げている⁵。これがおそらく最も一般的な見解であろう。カディールは、歴史的観点からの興味深い考察を加え、「世界」と呼ばれるものがこれまで文化的・政治的転換点において度々引き合いに出されてきたことを指摘する。ゲーテが一八二七年一月のエツカーマンとの会話のなかで世界文学の構想を示したのも、ナポレオン戦争後の、政治的に分裂したドイツにおいてであり、ヨーロッパは世紀後半には帝国主義時代へと突入していった。翻つて今日の世界に目を向けると、格差はますます広がり、文化的・宗教的紛争が各地で起こり、拡張主義的な動向も認められる。世界文学に関する議論の再燃は、歴史的トラウマの再来を暗示する不吉な兆しではあるまいか、という暗い予測をカディールは提示している。本年のIWLを主催した現代文芸論研究室

の沼野充義教授は、一研究者としての自身の経験に即して、世界文学に向き合うことは「この「世界」という手垢にまみれた言葉をいま一度アイロニカルな視線にさらしたうえで、改めてその可能性を探ってみ」ることであり、「様々な問題を抱えて閉塞しがちな現在の文芸批評や文学研究、さらには大学での文学教育のあり方」への自分なりの応答であるとしている。世界文学の在り方や意義に関する議論は今後も続けられるであろう。一方で、その間にも優れた研究成果が着実に蓄積していき、それらが世界文学という分野に確かな基盤を与えている。大事なものは実践である。ここで、先に言及したカデールの言葉を引いてみたい。

比較文学とは主題 (subject) でも対象 (object) でも問題 (problem) でもない。比較文学とは実践 (practice) である。それは、その実践者たちが行う行為のことである。これらの実践者たちは主体 (subjects) であり、彼らはその扱う材料を客体化 (objectivity) し、彼らの実践はなるほど問題含み (problematic) かもしれない。しかし何よりもまず比較文学はあるコーパスや主題や対象や一定不變の問題系によって定義されるのではない。むしろ、比較文学は、その名において何が行われるのか、それらの実践がどのように確認・制定・管理されるのかによって、

意義のあるものとなるのである。⁷

Comparatist ならぬ Worldist なる呼称が今後普及するかどうかは不明だが、世界文学の担い手たちがこの先「世界文学」という名の下で何を、どのように実践していくのか、大切なのは結局その点であろう。スピヴァクとの対話の最後にダムロッシュが述べた、「世界文学は、下手に行えば世界を平らにし、(中略) 上手く行えば、特異なものに新しく形を与え直す」という言葉が印象的だ。ハイ・リスク、ハイ・リターンというわけである。薄っぺらな世界とするか、時間的空間的広がりのある、表情豊かな世界とするかは、一人一人の手にかかっている。

各国文学、比較文学、世界文学は相互に作用し合う関係にあり、どれか一つが他のものを飲み込んでしまうのではない。モレットティは、各国文学と比較(あるいは世界)文学の関係性について、比較(あるいは世界)文学はつねに各国文学に対して、知的な異議申し立てを行う存在、「目の上のたんこぶ」でなければならぬと述べた。今度は世界文学が、比較文学にとつての目の上のたんこぶとなるのかもしれない。

- 1 Gayatri Chakravorty Spivak and David Damrosch, 'Comparative Literature/ World Literature: A Discussion' in *World Literature in Theory*, ed. by David Damrosch (Malden: Wiley Blackwell, 2014), pp. 363-388.
- 2 Gayatri Chakravorty Spivak, 'The Politics of Translation' in *The Translation Studies Reader*, ed. by Lawrence Venuti, 2nd edn (New York: Routledge, 2004), pp. 369-388 (p. 372). 括弧内補足は引用者に依る。
- 3 Spivak, p. 379.
- 4 David Damrosch, *What is World Literature?* (Princeton: Princeton University Press, 2003), p. 281. 傍点付引用者に依る。
- 5 Mads Rosendahl Thomsen, *Mapping World Literature: International Canonization and Transnational Literatures* (London: Continuum, 2008), pp. 1-23.
- 6 沼野充義「世界（文学）とは何か？」『UP』二〇〇五年一月号（二九—三四頁（二九頁））。
- 7 Djelal Kadir, 'To World, to Globalize: World Literature's Crossroads' in *World Literature in Theory*, pp. 264-270 (p. 265) (first publ. in *Comparative Literature Studies*, 41.1 (2004), 1-9).
- 8 Spivak and Damrosch, p. 379.
- 9 Franco Moretti, 'Conjectures on World Literature' in *World Literature*